

うちなあ点描  
● 第二百一十八回

# 宮古神社の建設

文と写真・平良 啓 Hiromu Taira

## ◎ 遷座祭

平成二十二年六月二十五日、日本最南端の神社である宮古神社にて、「新殿祭」に続いて「本殿遷座祭」が夜の八時から厳かに執り行われた。遷座祭とは、現社殿から新社殿に「御神霊」を移す儀式のことである。翌日の竣工奉祝祭では

式典・直会まっかいがあり、多くの宮古島市民と関係者が宮古神社の竣工を祝った。

## ◎ 宮古神社建設の経緯

一六六〇年頃に宮古神社の前身の宮古権現社が創始されて、町社・宮古神社が大正十四年に現在の宮古島市平良字西里に建立された。

その後合祀が行われ、総鎮守として祀られたが、戦禍を受けて荒廃し、昭和五十五年に新社殿が旧殿の場所に建立された。しかし敷地が狭く駐車場もないなどの理由から、広い場所への移転が計画された。地元の人々を中心に「宮古神社御造営奉賛会」が結成され、芳志と寄進等によって同市西里の元の場所である旧市民会館跡地に建設されることになった。

地鎮祭ののちに敷地の造成工事が行われ、平成二十一年八月八日に多くの関係者参列のもと、起工式が挙行された。それから本格的に工事が始まった。私は工事の総合監理という立場で参加させていただいた。

宮古神社は、第一・第二の鳥居と、そこから一直線上に配置された木造の本殿・幣殿・拝殿、向拝、その左右に鉄筋コンクリート造の社務所と休憩所から成る。手水舎は大鳥居をくぐって右手に設置されている。特に純木造の本格的な社殿の建設はめったにないことである。

木工事には九州の宮大工と沖繩の大工が参加した。木造の社殿は、原寸図を作成した上に、唐破風や軒反りなどの曲線を精密に加工している。虹梁や木鼻など

の彫刻は、設計者が描いた下絵を基に彫刻師が精巧に彫り上げている。

本殿の屋根には両端に天に伸びるY型の千木と水平に並ぶ五本の鯉木が配置され、神社としての風格を醸し出している。屋根は淡路産の瓦で葺いており、赤瓦にしたことで沖繩らしさが感じられる。拝殿の屋根の大棟には左右に火よけの金色の鴟尾を設置している。沖繩での木造建築物でこのような鴟尾を設置しているのは珍しい。建物は外部内

部とも金箔押し飾り金物で優雅な仕上げとなっている。境内に立っている木造の



大鳥居は高さが約七・二メートルで柱の直径は約六十センチもあり、その大きさに圧倒される。このような巨大な木造の鳥居を新たに建設することは全国的にも珍しいとのことである。なお、社殿と大鳥居にはラオス産ヒノキが使用されている。

神社古来の建築様式を再現している宮古神社は建築文化の発展と継承という点でも意義のあることと思われる。宮古神社が安寧を願う人々の心の拠り所として、また、宮古島の観光に寄与する神社として末長く存在していただけることを願っている。